

トランスジェンダー をいきる (18)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて (2)

名前と自称詞 (前編)

1 始めに

ここでいう「自称詞」とは、他者に対して自己のことをなんと言うか、である。たとえば、一般的に女性であれば「私」、男性であれば「僕」、もしくは「俺」、「わし」、「わい」などなど。

体の性別とジェンダーの性別が不一致であり、しかも自分の名前が、自他共に男女いずれかの性別とはっきり認識される場合、堂々と自己の名前を名乗ることができない、というのは苦痛である。その苦痛は、堂々と名前を名乗ることができない自己に対する恥ずかしさや、親からもらった名前を人前で堂々と名乗ることができない恥ずかしさの2重う大別することができるだろう。

また、日本語には、男女によって自称詞を使い分ける特性がある。この特性によって、筆者のように、体の性別とジェンダーの性別が不一致であると、多くの場合、体の性別に基づいた自称詞を選ばされてしまう。

体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性の筆者は、子どものころから「私」と言っていた。いや、本当はジェンダーの性別を優先して、「僕」もしくは「俺」と言いたかったが、両親や周囲の大人たちから、体・書類上の性別に基づいて、「私」ということを強制された、と言った方が正確だろう。

今回は、リアルライフ構築の2つ目のテーマの前編として、「名前と自称詞」について、子どものころから抱いていた女性名に対する激しい嫌悪・一般的に女性の自称詞として使用されている「私」という自称詞への違和感・男性名にして、一般的に使用されている男性の自称詞である「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用するまでの過程について詳述する。

2 女性名に対する激しい嫌悪と、「私」という自称詞への違和感

①女性名に対する激しい嫌悪

当然と言えば当然であるが、女性として出生した筆者は、両親から女性名を付けられ、牛若家の長女として位置づけられて育った。将来結婚して、牛若家から出て行くことを想像して、父の名前を1字付したということを、筆者は後になって知った。

ところが筆者は、子供のころから、視覚障害と共に、身体・書類上の性別（女性）に対して、常に違和感を持っていた。つまり、体、書類上の性別は女性であるにも関わらず、心理的には男性であると認識していた。両親や盲学校の先生や友達から女性名で呼ばれたり、女性名を省略した愛称で呼ばれたりする度、恥ずかしくてまともに返事をするができなかった。また、女性名で呼ばれることで、体や書類の性別だけで女性と判断され、ジェンダーの性別が軽視されていることへの苛立ちや悲哀を覚えていた。そこで筆者は、友達に手紙や年賀状を書くときは、「牛若」という苗字だけを書いて、下の女性名は書かずに投函した。

家業が美容院と理髪店という職業柄か、両親はそのような筆者に対して、特に服装や身だしなみの面で「女らしさ」を強制してきたので、そのたびに喧嘩が絶えなかった。その喧嘩の際、両親から、女性名で叱責されたときは、「名前と呼ぶな！」と大声を張り上げて怒ったものである。また、当時は父方の祖母と同居していた。明治生まれの祖母は、男尊女卑の考え方が寝ずよく残っていた人であった。そこで、筆者のさまざまな「女らしくない態度」に対して「あなたは、眼が見えない女性であることを意識しながら生きていかなければならないんだよ」と説教していた。祖母もよく、筆者の女性名を呼んで叱っていたが、「祖母の言うことには口答えをしないこと」という、牛若家の家訓に逆らうことができなかったので、ぐっと耐えるしかなかった。

②「私」という自称詞への違和感

女性名を付けられたことに伴い、両親や周囲の大人たちからは、他者に対して自分のことを「私」と言うように強制された。筆者はこの「私」という自称詞に対しても、違和感があった。

2歳年上の兄は、筆者からみて男らしい名前であったので、自分のことを「僕」、もしくは「俺」と言っていた。筆者は子どものころから、言葉の響き方や音に対して興味があったので、この「僕」、もしくは「俺」という自称詞に対して密かに憧れを抱いていた。兄は、男らしい名前を付けられたことで、このどこか自由で力強い「僕」、もしくは「俺」という自称詞を自由に使えるんだな、その反面、女性名を付けられたことに伴って筆者に強制された「私」という自称詞には、どこか重苦しく自由さがないなあ、というのが、筆者の自称詞に対する率直な感想だった。

ところがあるとき、ひよんなことから、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに気づいた。それまで、「私」という自称詞は、一般的に女性が使用するもの、と思っていた筆者は、ある男性が「私」という自称詞を使用していることに、最初は違和感を覚えた。しかし、「私」という自称詞を使用していたのは、その男性だけではなく、複数の男性、それも、テレビ番組や講演などの公的な場で「私」という自称詞を使用していたことに気づいたとき、筆者はほっとすると同時に、それでも、筆者自身が「私」という自称詞を使用することに対しては、根強い違和感

を覚えずにはいられなかった。

3 男性名にして、「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

① 男性名にするまでの経緯

鍼灸マッサージ師の資格を取り、就職してから一人暮らしをして数年経ったころ、祖母が亡くなった。そのことをきっかけに、筆者はひそかに、次のような計画を立てるようになった。それは、「両親のどちらかが亡くなったら、男性として生きていくために男性名にすること」である。視覚に障害があるため、書類などの名前の記入欄に女性名を代筆していただくときの恥ずかしさは、今思い出してもぞっとするほどであった。

2005年11月、立命館大学の社会人入試に合格したことを母に知らせる電話をしたとき、母に大腸癌が見つかったことを、母自身から告げられた。そのとき、(いよいよ、男性として生きていくための決心を固めて、男性名を決めなくては)と考えた。そして、このころから、性同一性障害に関する手記を読み、名前を男性名にするには、まず、病院で性同一性障害の診断書をもって、それを申立書と一緒に家庭裁判所に提出する、という手順を知った。

2007年5月、母が亡くなった。実家に帰り、母の遺体と対面し、通夜・葬儀に参列したとき、近いうちに病院で性同一性障害の診断書をもって、男性名にすることを決意した。

2008年2月、ぼう大学病院のジェンダークリニックに通い始めた。そこで真っ先に聞かれたのは、「通称名は決まっていますか？」ということであった。そこで筆者ははっと気づかされる。男性名にしたいという気持ちはあっても、子供のころから視覚に障害があり、点字を使用していたので、視覚に障害のない人たちより、漢字の知識が乏しいことを理由に、今まで具体的にどんな男性名にするかを決めていなかった。そこで、筆者の女性名に由来した名前と、とっさに出てきた1時名で、その日1日診察を受けたが、どうもしっくりこなかった。ちょうどそのころ、ある授業で、「儒教文化」について学んだ。その儒教文化にヒントを得て、考え出した1時名をしばらく使っていたが、これもしっくりこなかった。そこで今度はパソコンで、ジェンダークリニックで診察を受けた際の男性名と、儒教文化にヒントを得た男性名と一緒に使われている男性名があるかどうかを調べてみると、「孝治」という名前が出てきた。最初は、この名前に対して、あまり乗り気ではなかったし、なんだか古めかしくてどうなのか？と疑問を抱いていたのだが、その一方で、なんだかこの「孝治」という名前が気になって仕方がなかった。そこで、点字の感じの辞書で調べてみると、女性名を逆にして、その上に冠を付けて完成させたシンプルな名前であることが分かり、ぱっと電流が走ったようなショックを覚えてびっくりした。(この名前なら、家族を納得させることができる)と確信した筆者は、その日から通称名として、「孝治」という名を使用することにした。

② 「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用する

やっと決めた男性名を使用して2・3日経過したころ、ある集会で筆者は、通称名で参加した。そして、集会の場で、次のように言ってみた。「私はこれから、「孝治」という名で生きていきま

す。そこで、「私」とは言わずに、「僕」、もしくは「俺」と言ってもいいですか?」。すると、ものすごい拍手の嵐。

だが、実際に「僕」、もしくは「俺」という自称詞を使用してみると、最初はやはりなんだかしっくりこないような気がした。まるで、新しくかぶせた歯が、なかなか他の歯となじまないような感覚であった。特に、「俺」というのは、「僕」より強くてカッコいい印象がある分、なんとなく気後れがしそうだった。(自分のジェンダーの性別は男なのに、そして男性名を通称名として使用しているのに、なぜ「僕」、もしくは「俺」と言ったとき、こんなにも気後れがするのか)と少々悩みながらも、いつしかこの「僕」、もしくは「俺」という自称詞が、筆者の自称詞として自然に使用することができるようになっていった。

4 終わりに

今回は、「名前と自称詞（後編）」として、戸籍上男性名にしてからの自己の変革について詳述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）